

古文ドリル：「が」の識別 100問

対象：高校生・大学受験生（共通テスト～難関私大・国公立二次まで） **著作権：**個別指導塾フィット / 中本裕太

はじめに：「が」の正体（4パターン）

古文の「が」は **現代語と用法が異なる** 点が試される。大きく **4種類** あります。

種類	接続/品詞	判別ポイント	例
① 格助詞「が」 （主格）	体言・連体 形接続	「～が」と訳す。後ろの用言の 主語を示す	我 が 思ふ人
② 格助詞「が」 （連体修飾格）	体言・連体 形接続	「～の」と訳す。すぐ後ろが体 言	君 が 代・我 が 身
③ 格助詞「が」 （同格）	体言・連体 形接続	「～で」と訳す。後ろの連体形 が同じ人・物を説明する	やむごとなき際にはあらぬ が 、す ぐれて時めき給ふ（ありけり）
④ 接続助詞「が」	連体形接続	逆接「～けれども」・単純接続 「～と・～ところ・～で」	行く が 、戻る

このほか、格助詞「が」には「～のもの」と訳す **準体格** もあります（例：「この歌は、ある人のいはく、大伴のくろぬし**が**なり」〈古今集〉＝大伴黒主の歌である）。数が少ないので、このドリルでは上の4つを練習します。

識別の鉄則

- 主格「が」** は現代語と同じ「～が」（主語を示す）。連体形に付くときは「～のが」と訳す。古文の主格「が」は「我が思ふ人」「犬君が逃がしつる」のように人を表す語に付くことが多く、「月が出づ」のような言い方はふつうしない（古文なら「月出づ」）
- 連体修飾格「が」** は現代語の「～の」に相当（古文独特）。すぐ後ろに体言が来る（我が身・君が代）
- 同格「が」** は「～で」。「が」のあとに連体形が来て、前と同じ人・物を説明する（その連体形の下に前と同じ体言を補える）
- 接続助詞「が」** は連体形＋「が」のあとに言い切りの別の文が続く形（連体形の下に「こと・の」を補っても後ろの主語にならない）→ 逆接「～けれども」か単純接続「～と・～ところ・～で」（平安時代の終わりごろから使われ、中世の文に多い）
- 「我が・君が・誰が」は「が」の **すぐ後ろ** で決まる：体言なら **連体修飾格**（我が身＝私の身）、用言なら **主格**（我が思ふ人＝私が思う人）

🎯 解き方のコツ（時短テクニック）

上の「識別の鉄則」は「が」の用法の決まり。

ここからは、それを **試験本番ですばやく使う** ための見分け方です。

コツ① 「我が／君が／誰が」は「が」のすぐ後ろで決める

すぐ後ろが体言なら連体修飾格「～の」、用言なら主格「～が」。例：「我**が**心」→「私**の**心」（連体修飾格）／「我**が**思ふ人」→「私**が**思う人」（主格）最後に体言（人）があっても、「が」がかかるのはすぐ後ろの「思ふ」。「私の思う人」と訳せても、働きは主格。

コツ② 「が」の直後で見分ける

- 直後が **体言（名詞）** → 連体修飾格「～の」（例：我が家）
- 直後が **用言（動詞・形容詞）** で、「が」がその主語 → 主格「～が」（例：我が思ふ人）
- 後ろの **連体形が前と同じ人・物を説明** している → 同格「～で」
- 連体形＋「が」のあとに **言い切りの別の文** が続き、「こと・の」を補っても後ろの主語にならない → 接続助詞「～けれども／～と・～で」（読点があるだけでは決まらない）

コツ③ 同格「が」は「～が、（連体形）[＋前と同じ体言]」のパターン

「が」のあとに **連体形** が来て、その下に前と同じ人・物を補える → 同格。例：「いとやむごとなき際にはあらぬ**が**、すぐれて時めき給ふありけり」（源氏物語・桐壺）→「それほど高貴な身分ではない方**で**、際立って帝のご寵愛を受けていらっしゃる方がいた」「が」の後ろが「世に出でず。」のように、そのまま述語として文を言い切っていれば同格ではない（接続助詞か主格）。読点があるだけでは決まらない。

コツ④ 接続助詞「が」は、主語にならないことを確かめてから訳す

連体形＋「が」のあと **言い切りの別の文** が続き、連体形の下に「こと・の」を補っても後ろの主語にならない → 接続助詞。逆接「～けれども」で通れば逆接、逆らう関係がなければ単純接続「～と・～ところ・～で」。例：「行く**が**、戻る」→「行く**けれども**、戻る」（逆接）／「御前に参りたる**が**、人々多くさぶらふ」→「御前に参上した**ところ**、人々が大勢お仕えしている」（単純接続）「雁などの連ねたる**が**、いと小さく見ゆる」（枕草子）のように、補った「の」が後ろの主語になれば主格（列をなしているのが、とても小さく見える）。

試験本番でのチェック順序

- 「が」の **直前** が体言か連体形かを確認
- 「が」の **直後** が体言なら連体修飾格（「我が・君が」も同じ）
- 「が」の後ろの連体形が前と同じ人・物を説明していれば同格

4. 「が」が後ろの用言の主語なら主格（連体形＋「が」は、下に「こと・の」を補って主語になるかを確認する）
5. 連体形＋「が」のあとに言い切りの別の文が続き、主語にならなければ接続助詞（逆接か単純接続か）

→ この順番で確かめれば、**迷わず** 答えが出せます。

よくある引っかけ

- ・「我が心」を現代語感覚で「私が心」（主格）と誤答 → 古文では「私の心」（連体修飾格）
- ・「我が思ふ人」を「私の思う人」と訳して連体修飾格にする → 「が」のすぐ後ろは用言「思ふ」なので主格
- ・「～なるが、」をすべて同格にする → 後ろが「世に出でず。」のように言い切っていれば同格ではない（多くは接続助詞。下に「人・こと」を補って後ろの主語になれば主格）。同格は、後ろに同じ人・物を説明する連体形が来る形
- ・「君が代」を「君が栄える代」と主格で訳す → 「君の御代」（連体修飾格）

採点表

- ・ 基礎（Q1～Q20）： /20
- ・ 標準（Q21～Q50）： /30
- ・ 応用（Q51～Q80）： /30
- ・ 入試レベル（Q81～Q100）： /20
- ・ 合計： /100

【第1部】基礎編（Q1～Q20）

4パターンを識別する基本問題。

Q1. 次の傍線部「が」を識別せよ。

君**が**住む宿。

Q2. 次の傍線部「が」を識別せよ。

君**が**代は千代に八千代に。

Q3. 次の傍線部「が」を識別せよ。

あはれなる人^が、また心優しい人。

Q4. 次の傍線部「が」を識別せよ。

行く^が、また戻る。

Q5. 次の傍線部「が」を識別せよ。

母^が縫ひし衣。

Q6. 次の傍線部「が」を識別せよ。

我^が家。

Q7. 次の傍線部「が」を識別せよ。

雀の子を犬君^が逃がしつる。

Q8. 次の傍線部「が」を識別せよ。

君^が心。

Q9. 次の傍線部「が」を識別せよ。

いみじき人^が、また気高き人。

Q10. 次の傍線部「が」を識別せよ。

春来るが、まだ寒し。

Q11. 次の傍線部「が」を識別せよ。

誰が問ふ。

Q12. 次の傍線部「が」を識別せよ。

我が思ふ人。

Q13. 次の傍線部「が」を識別せよ。

翁が植ゑし松。

Q14. 次の傍線部「が」を識別せよ。

君が御代。

Q15. 次の傍線部「が」を識別せよ。

心ある人が、また物静かなる人。

Q16. 次の傍線部「が」を識別せよ。

行かむと思ふが、雨降り。

Q17. 次の傍線部「が」を識別せよ。

父が仰せ。

Q18. 次の傍線部「が」を識別せよ。

父が言ひしこと。

Q19. 次の傍線部「が」を識別せよ。

我が身。

Q20. 次の傍線部「が」を識別せよ。

笛吹く人が、また歌詠みけり。

基礎編 / 20

【第2部】標準編（Q21～Q50）

接続助詞と格助詞の見分け、文脈での判別を含む応用問題。

Q21. 次の傍線部「が」を識別せよ。

宮も君が心を知り給はず。

Q22. 次の傍線部「が」を識別せよ。

月明らかなる夜なるが、にはかに雲出でて、月隠れぬ。

Q23. 次の傍線部「が」を識別せよ。

風吹くが、波は立たず。

Q24. 次の傍線部「が」を識別せよ。

我が心、君は知らじ。

Q25. 次の傍線部「が」を識別せよ。

兄が出でて行きし後、家の内いと寂し。

Q26. 次の傍線部「が」を識別せよ。

子は父が仰せに従ふ。

Q27. 次の傍線部「が」を識別せよ。

いみじき宿世の人なるが、いま落ちぶれぬ。

Q28. 次の傍線部「が」を識別せよ。

我が身を恨み給ふな。

Q29. 次の傍線部「が」を識別せよ。

文をやるが、返り事もせず。

Q30. 次の傍線部「が」を識別せよ。

あるじ**が**来れば、皆立ちて迎ふ。

Q31. 次の傍線部「が」を識別せよ。

君**が**御志。

Q32. 次の傍線部「が」を識別せよ。

春行く**が**、なほ花散らず。

Q33. 次の傍線部「が」を識別せよ。

我**が**生まれし日。

Q34. 次の傍線部「が」を識別せよ。

月清き夜なる**が**、また風静かなり。

Q35. 次の傍線部「が」を識別せよ。

雪の降り出づる**が**、いとあはれなり。

Q36. 次の傍線部「が」を識別せよ。

父**が**怒り給ふ。

Q37. 次の傍線部「が」を識別せよ。

物言はぬ人なるが、人の心をよく知り給ふありけり。

Q38. 次の傍線部「が」を識別せよ。

心安らかなる人が、いと頼もし。

Q39. 次の傍線部「が」を識別せよ。

春雨降るが、花咲かず。

Q40. 次の傍線部「が」を識別せよ。

母上は、君が御身をのみ案じ給ふ。

Q41. 次の傍線部「が」を識別せよ。

我が思ふこと、人に語らじ。

Q42. 次の傍線部「が」を識別せよ。

年老いたる翁なるが、目もよく見えぬ、杖にすがりて来たり。

Q43. 次の傍線部「が」を識別せよ。

君が来るを待つ。

Q44. 次の傍線部「が」を識別せよ。

我が心、いまだ定まらず。

Q45. 次の傍線部「が」を識別せよ。

都より来たる人なるが、物よく知りたる、この里に住みけり。

Q46. 次の傍線部「が」を識別せよ。

鶯鳴くが、春なほ浅し。

Q47. 次の傍線部「が」を識別せよ。

我が家、京にあり。

Q48. 次の傍線部「が」を識別せよ。

鳥の飛ぶが見ゆ。

Q49. 次の傍線部「が」を識別せよ。

君が仰せに従ひ給へ。

Q50. 次の傍線部「が」を識別せよ。

人あまた呼びて尋ぬるが、知る者なし。

【第3部】 応用編（Q51～Q80）

文脈・係り結び・引用が絡む応用問題。

Q51. 次の傍線部「が」を識別せよ。

あひ知りたる人^が、また同じ道を行きけり。

Q52. 次の傍線部「が」を識別せよ。

我^が思ふ人、いま死にぬ。

Q53. 次の傍線部「が」を識別せよ。

月明らけき夜なる^が、木の下はなほ暗し。

Q54. 次の傍線部「が」を識別せよ。

鳥のさへづる^が、いとあはれなり。

Q55. 次の傍線部「が」を識別せよ。

君^が御志ありて、世に伝はる。

Q56. 次の傍線部「が」を識別せよ。

知らぬ人^が問ふ。

Q57. 次の傍線部「が」を識別せよ。

我が国の人、もろこしに渡る。

Q58. 次の傍線部「が」を識別せよ。

いみじき才ありし人なるが、世に出でず。

Q59. 次の傍線部「が」を識別せよ。

春の夜の闇はあやなし梅の花色こそ見えね香やは隠るる——この歌、人皆知るが、その心、知らず。

Q60. 次の傍線部「が」を識別せよ。

いと尊き人なるが、人前にては謙りて、自らを卑しめ給ふ。

Q61. 次の傍線部「が」を識別せよ。

我が心ながらも、悲し。

Q62. 次の傍線部「が」を識別せよ。

仏に祈らむがためなり。

Q63. 次の傍線部「が」を識別せよ。

おのが行く方も知らず。

Q64. 次の傍線部「が」を識別せよ。

我^が思ふ人は、誰^がゆゑにかく嘆くらむ。

Q65. 次の傍線部「が」を識別せよ。

若き法師なる^が、歌よく詠むありけり。

Q66. 次の傍線部「が」を識別せよ。

いとあはれなる人なる^が、心の浅きこと申すよ。

Q67. 次の傍線部「が」を識別せよ。

君^が御身、健やかにあれ。

Q68. 次の傍線部「が」を識別せよ。

我^が家に來たる人、皆もてなさず。

Q69. 次の傍線部「が」を識別せよ。

木の葉散る^が、なほ風吹かず。

Q70. 次の傍線部「が」を識別せよ。

童^が呼ぶ声、遠く聞こゆ。

Q71. 次の傍線部「が」を識別せよ。

年若き者なるが、心ばへいとよき、主によく仕へけり。

Q72. 次の傍線部「が」を識別せよ。

桜花散るが、山吹はなほ盛りなり。

Q73. 次の傍線部「が」を識別せよ。

月隠るるが見ゆ。

Q74. 次の傍線部「が」を識別せよ。

我が心、いま定まりぬ。

Q75. 次の傍線部「が」を識別せよ。

旅人が問ふ。

Q76. 次の傍線部「が」を識別せよ。

いと幼き童なるが、笛ををかしう吹くありけり。

Q77. 次の傍線部「が」を識別せよ。

名にし負ふ都鳥がゆゑ。

Q78. 次の傍線部「が」を識別せよ。

我がゆゑに、君は苦しみ給ふ。

Q79. 次の傍線部「が」を識別せよ。

君が心、定まらず。

Q80. 次の傍線部「が」を識別せよ。

君が思ひ給ふやう。

応用編 / 30

【第4部】入試レベル (Q81~Q100)

Q81. 次の傍線部「が」を識別せよ。

我が身、いまだ若きを、なほ嘆く。

Q82. 次の傍線部「が」を識別せよ。

その頃、大納言の御娘なるが、琴をいみじう弾き給ふ、おはしけり。

Q83. 次の傍線部「が」を識別せよ。

君が御代、千代にもがな。

Q84. 次の傍線部「が」を識別せよ。

中宮、御文書かせたまふが、ことのほかに気高し。

Q85. 次の傍線部「が」を識別せよ。

我が見し人の、いまは無きを嘆く。

Q86. 次の傍線部「が」を識別せよ。

飛ぶ鳥のさへづり、いと聞きにくきが、なほ耳澄まして聞く。

Q87. 次の傍線部「が」を識別せよ。

我が心ぞ嘆かるる。

Q88. 次の傍線部「が」を識別せよ。

月明らかなる夜なるが、雲なくしてさやけし。

Q89. 次の傍線部「が」を識別せよ。

君が御身を案じ奉る人、世に多し。

Q90. 次の傍線部「が」を識別せよ。

名にし負はばいざ言問はむ都鳥わが思ふ人はいやなしやと

Q91. 次の傍線部「が」を識別せよ。

我が心ながら、いかにせむ。

Q92. 次の傍線部「が」を識別せよ。

嵐の風吹くが、舟出でぬ。

Q93. 次の傍線部「が」を識別せよ。

月の出づるが心もとなし。

Q94. 次の傍線部「が」を識別せよ。

我が思ひ嘆くこと、限りなし。

Q95. 次の傍線部「が」を識別せよ。

唐土の人なるが、和歌をも詠み給ふ。

Q96. 次の傍線部「が」を識別せよ。

宮、御琴を弾き給ふが、ほのかに聞こゆ。

Q97. 次の傍線部「が」を識別せよ。

春過ぎて夏来ぬるが、まだ涼し。

Q98. 次の傍線部「が」を識別せよ。

心ある人なる**が**、和歌の道に心入れ給ふ。

Q99. 次の傍線部「が」を識別せよ。

いづれの御時にか、女御、更衣あまたさぶらひ給ひける中に、いとやむごとなき際にはあらぬ**が**、すぐれて時めき給ふありけり。

Q100. 次の傍線部「が」を識別せよ。

行く川のながれは絶えずして、しかも、もとの水にあらず。よどみに浮かぶうたかたは、かつ消えかつ結びて、久しくとどまりたるためしなし。世の中にある人とすみかと、またかくのごとし。たましきの都のうちに棟を並べ、薨を争へる、高き、いやしき、人の住まひは、世々を経て尽きせぬものなれど、これをまことかと尋ねれば、昔ありし家はまれなり。或は去年焼けて今年作れり。或は大家ほろびて小家となる。住む人もこれに同じ。所も変はらず、人も多かれど、いにしへ見し人は、二三十人**が**中に、わづかにひとりふたりなり。

入試レベル / 20

合計 / 100

あとがき

「が」の識別の核心： - **格助詞「が」(主格)** 現代語と同じ「～が」(主語)。古文では人を表す語に付くことが多い - **格助詞「が」(連体修飾格)** 現代語の「～の」に相当(古文独特)。すぐ後ろが体言 - **格助詞「が」(同格)** 「が」のあとに連体形が来て、前と同じ人・物を説明する(下に同じ体言を補える) - **接続助詞「が」** 平安時代の終わりごろから使われる。連体形+「が」のあとに言い切りの文が続く(「こと・の」を補っても後ろの主語にならない)、逆接「～けれども」か単純接続「～と・～で」

「我が・君が・誰が」は「が」のすぐ後ろで決まる：体言なら **連体修飾格**(我が身=私の身)、用言なら **主格**(我が思ふ人=私が思う人)。

